

安田女子短大 ○道丹博子 広島大附中・高 鳥井葉子

目的 毎日の食事は、体に必要な栄養素をバランスよく摂取するために、各食品群からかたよりなく、多数の食品を食べるようにする必要がある。中学生は成長の著しいときなのに、野菜類を好まない傾向が見られるので、個々の野菜に対する好みを明らかにし、中学校技術・家庭科の食物領域の基礎資料を得るために、一対比較法で調査した。

方法 調査対象は北海道(函館市、上磯郡)、東京都(渋谷区、新宿区、保谷市)、天理市、広島県(呉市、三次市、広島市)の中学2・3年生の男女2437名。調査期間は1992年6～9月。調査方法は某社の旧(1992年度使用)技術・家庭科の教科書にある食物領域の食品から12食品(じゃがいも、魚、卵、肉、わかめ、牛乳、チーズ、みかん、りんご、とうふ、にんじん、たまねぎ)を精選し、66対の調査項目と、また、日常よく利用される野菜の9食品(きゅうり、だいこん、キャベツ、たまねぎ、トマト、にんじん、ほうれんそう、ピーマン、ねぎ)から36対の調査項目を作成し、2種類の調査を行った。

結果 12食品の調査では、4地域を通して、多少の順位は異なるが、肉、みかん、りんごなどの順に好まれ、にんじん、たまねぎ、とうふ、わかめの順に好まれていない。また、男女別では女子と比較して男子は肉を好む傾向が見られた。

次に、野菜9食品の調査では、トマト、きゅうり、キャベツの順に好まれ、ピーマン、にんじん、ねぎの順に好まれていない。また、全地域の男女別においても同一の結果となった。今後、好まれない食品をどのように好きにさせていくかを検討課題にしたい。